

---

# 高町亜美の物語

学校嫌い

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

高町亜美の物語

### 【Nコード】

N7765Y

### 【作者名】

学校嫌い

### 【あらすじ】

黒い穴に吸い込まれ、空に放り出された高町亜美は、落下中にドラゴンと遭遇するが意識を失ってしまふ。次に目を開けた時、高町亜美の目の前にはいたのは 。高町亜美。彼女は異世界で何を成すのか。

## 初恋

「ひゃあああああああ！」

自由落下を始めて五分程経過しているけど、紐なしバンジーみたいで楽しい。バンジージャンプをしたことがないからいまいち感覚は分からないけど、戻ったらやってみようかな？あとスカイダイビング・・・は今してるからいいや。

バサ！

突然聞こえた、何か羽ばたく様な音のした方を見ると、そこには白くて巨大なドラゴンがいた。正確にはどうか分からないけど、まあ形状からして間違いないと思う。なんでドラゴンがいるのか、とか思いはしたけど、多分こっつて日本じゃないから、いても可笑しくはないかな、とも思う。

2

はあ・・・やっぱり日本じゃないのか・・・。

それを何となくでも理解すると一気にテンションが下がった。さっきまでの楽しい気分が嘘みたいだ。少しは希望があったんだけどなあ・・・せめて地上が見えてくるまでは、日本だって思っていたかった。街なんかを見れば、どこだか大体の見当は付くと思ったけど、ドラゴンなんて、日本どころか世界のどこにも存在する訳がない。

バサ、とまた羽ばたく音が聞こえて、見ると落下しているあたしを、

さっきのドラゴンが追いかけてきていた。

ここで死ぬのかな？

そう思った途端、一気に恐怖が込みあがってきた。

やだ・・・こんな訳の分からない所で死にたくない・・・。

「たすけて・・・旭・・・」

何の力も持っていないあたしに何ができる訳もなく、唯それを願うことしかできずに。

目尻に浮かんだ涙をどうすることもできずに。

あたしは意識を失った。

何かがあたしを受け止めるのを感じながら

旭と隼の二人とは、転校した小学校で会った。初日にみんなに見ら

れているのを少し恥ずかしく思いながら、自己紹介をして、席に向かうと、後ろには無表情の男の子がいた。

その男の子が旭だった。

話しかけても無視されて、人付き合いが苦手なのかな？と思いつながら席に着くと、前に座っていた女の子が小声で、何言っても無視されるから放っておきなよ、と言ってきたけどあたしはそんなことどうでも良かった。

折角席が近くなったんだから、お喋りしたい。

その日からあたしは、ずっと旭に話しかけていた。一週間経っても二週間経っても旭は一度も返事をくれたり、表情を変えてくれたりしなかったけど、一ヶ月位が経った時に、旭の顔を暫くじゅつと見つめていて、笑ったらどんな顔するのかな？と思って、

『ねえ・・・少しは笑おうよ？』

と言うと、旭はどうして、と聞き返してきた。

質問された、ということよりもやっと返事をしてくれたことの方が嬉しくて、あたしははしゃいでいた。そんなあたしを見て、今度は旭から問いかけてきた。

『何がそんなに嬉しいの？』

と。

あたしはその問いに無視されると辛いから、みたいなことを言ったと思う。

そして、また旭は質問に答えてくれてないと言って、あたしは笑った顔が見たいだけ、と答えた。

『・・・・・・・・・・はは』

その時、旭は初めて笑った。

何かおかしな所があったのか、それ以外に何かあったのかは分からないけど、とにかく旭は笑った。

それから旭が笑うことはほっつっつとんど無かったけど、それでも色々話してくれるようになった。

二年生になって、いつだったかは忘れたけど、一人で体育の後片付けをしている雫を見つけて、あたしと旭で手伝って、その時は、まあ関わることは無いだろうな・・・・って思ったけど、次の日に雫の方から来てくれた。

用件は昨日のお礼だったみたいだけど、一度言ってくれたんだからそれで十分だったんだけど・・・・とは思ったけど、多分本人もそれ

が目的だったんじゃないと思う。

それからは雫も加わって、三人でいることが多くなった。流石に修学旅行の時とかは無理だったけど、そういったこと以外では、ほぼ毎日。その過程で、あたしは段々雫に対して抱いている好意が友達に対するそれとは、どこか違うな、と思うようになった。

それが何なのか理解したのは、雫が小学校を卒業した時だった。

明日から雫はこの学校にいないんだって思うと、急に胸が締め付けられた気がして……。

これが好きって感情なんだって、子どもながらも理解できた。

旭は気付いていたみたいだけど、何故か教えてくれなかったんだよね……。それで良かったって思ってるけど。

雫も気が付いていたことにはびっくりしたけど。

ま、その恋が実ることは無かったけど、変わらず一緒にいてくれたから嬉しかった。

その内、誰か別の人を好きになるだろうなあ……。とは思っていたけど、結局今日まで、他の女の子に恋をしたことはなかったな……。

『貴女の初恋が私だっていうことは、私にとっては光栄よ?』

そう言ってくれただけでも嬉しかったから、良かったかな?

そんな雫の初恋は旭だったんだよね・・・どうもあたしは恋愛沙汰に疎い様で、雫が旭に対して抱いていた好意が恋愛感情だとは気付かなかった。

今では、二人ともめでたくカップルになっているけど・・・二人とも同じ場所に飛ばされかな？

あの二人にはずっと一緒にいてもらいたい。

旭なら雫を何があっても守ってくれるだろうから。

でも、もし別々の場所に飛ばされていたら、誰が雫を守ってくれるんだろう？

誰が雫の隣に立つんだろう？

ツンツン・・・と何か、先の尖った様な物につつかれているのを感じて、あたしは落下中に意識を失ったことを思い出して、目を開いた。

「グオオ〜」

目の前には、さっきの白いドラゴンがいて、その蒼い瞳に心配そうな色を浮かべてあたしを見ていた。



## 契約

『やっと目を覚ましてくれた!』

「え?」

目の前にいた、心配の色を浮かべてあたしを見ていた白いドラゴンに驚く前に、何か声が聞こえてどこから聞こえたのか辺りを見回してみた。

どうやら此処洞窟のみたい。壁には松明や照明と言った光源が無いのに、何故か遠くまで見えるほど明るい。大きさから考えると、ドラゴンの巢か何かかも知れない。

適当に見回して、もう一度ドラゴンに視線を戻そうとしたら、

『どうかした?』

とまた声が聞こえた。

頭の中に・・・直接?

そんな感じだった。

こんな経験はしたこと無いし、するなんて思っただけだから、分からないけど、所謂テレパシーというやつかもしれない。それならあたしに話しかけているのは、目の前のドラゴンってことになるのかも知れないけど・・・どうなんだろう？

「今、あたしに話しかけているのはあなたなの？」

自分で言うのも何だけど、いつになくあたしは真剣になって聞いた。

旭と雫が見たら、多分驚くかも・・・。

『うん。もう大丈夫？』

声が聞こえて、明らかにあたしの質問に答えている回答言葉だったから、声の主はこのドラゴンだと確信できた。

どこか幼さを残すような声をしていて、でも通る声。

外見も手伝ってか、余計に綺麗に見えた。

と、今はそんなことを考えてる場合じゃないか・・・。

「いきなり変なこと聞いてごめん。助けに来てありがとう」

『うん。ボクがそうしたいからただけ』

「それでも、助けられたことには変わらないから……。それで、どうして、あたしを？」

ドラゴンがどんな生命体なのか、なんてことは分からないけど、漫画なんかでは大抵が強敵として描かれたりしている。

そんなドラゴンがどうして、人間を助けたんだろう？

考えたけど、返ってきたのは

『助けたいと思ったから』

と言う、なんとも表現しがたい言葉だった。

回答として少しずれている気がしたけど、本人がそう思って行動したなら、あたしにとやかく言う筋合いはない……。

「そっか」

『ねえ、貴女の名前は？』

「え？あ、そっか……名乗ってなかったね。あたしは高町亜美」

『アミ……。いい名前』

「ありがとう。あなた？」

そう聞くと、ドラゴンは少しの間黙った。

『・・・わたしに名前はないの』

「・・・・・・・・」

それを聞いても、あたしは不思議と取り乱さなかった。

「白亜あへま」

『え？』

「え？あ・・・何だろう？あなたを見てたら、急に浮かんできたんだけど・・・ごめんね？なんでも ないから気にしないで」

本当に急に、浮かんできて、自分でも戸惑っていた。

『ハクア・・・』

ドラゴンはその単語を噛みしめるように、呟いて、その後も何度か繰り返した。

『わたしと契約して？』

「え？」

多分十回目くらい、ハクア、と呟いた後、ドラゴンは唐突にそう言

った。契約つて言うのがなんなのか、そんなことは分からない。

分からない筈なのに、分かった。

だから

「うん」

あたしは頷いた。

立ち上がり、ドラゴンと向かい合う。

目を閉じて、意識をドラゴンにだけ集中すると、唯でさえ静かだったこの洞窟が余計に静かになったような気がした。感覚が鋭くなっているのか、周りに存在する小さな存在。それがなんなのか分からないけど、それも感じ取ることができる。

『私の御魂は汝と共に』

汝の御魂は我と共に』

「汝の御魂は我と共に

私の御魂は汝と共に」

キン、と甲高い音が聞こえた。

『汝我に名を与えたまえ』

「汝の名はハクア」

『我の名はハクア』

「『我の御魂は汝と共に

汝の御魂は我と共に』」

ゆっくりと目を開きながら、最後の言葉を紡ぐ。

あたしとハクアの立っている場所に何か、複雑な紋様が浮かんだ、  
円が浮かんでいた。

例えば、魔法陣くらいしか思い浮かばないけど、多分それに近いもの。

『後はお互いの血を一滴飲めば、儀式は終わり』

人差し指をハクアの前に出して、鉤爪で指先をちよんと突いてもら  
うとそこから血が、少し膨らむように出てきた。顔を降ろしてきて、  
ハクアは指先を舐めて、こくん、とその大きな喉を鳴らした。

すると、ハクアの体が柔らかい光に包まれて、姿が段々変わってい  
った。

小さくなっていき、その姿は少しずつ人間に近づいていった。

光が収まった時、そこには小さな女の子が立っていた。

髪はあたしと同じくらい白くて、身長はあたしより少し高い位。服  
装は白いワンピースだけ。

肌は白いけど、不健康な印象は全くない。

少女の姿になったハクアは自分の指先を噛み、あたしの方に突きだ  
してきた。

その指先を口に銜えてその血を舐め取り、飲み込む。

ドクン、と心臓が鳴り、体の中が熱くなった。

この後すぐにあたしは意識を失うことを、どうしてか分からないけど、分かっていた。

この先、あたしはこの何も分からない土地で生きていく。

多分・・・いや、きっと元の世界には還れない。

二人にも、もう会えない。

「泣かないで？」

その言葉を最後に、あたしは意識を失った。

旭。

雫。

さよなら

## 開始

「ん・・・？あ、そっか・・・」

あたしハクアの血を飲んだ後、気を失ったんだっけ？どれくらい寝てたのか、分からないけど・・・ハクアはどこだろう？

洞窟の見える範囲にはいない。

ご飯でも探しに行ってるのかな？そういえば、まだ何も食べてないんだよね・・・帰る途中で吸い込まれたから、お腹も結構空いてただけど、こっちに来てからはそんなこと気にする余裕が無かったし。とりあえず・・・待っておこう。

感覚的に三十分位経った頃、小さな羽ばたき音が聞こえて、見てみるとハクアが姿は少女のまままで背中を広げて飛んできていた。その手には何か鹿の様な生き物を抱えている。

まあ、それは良いけど、大きさがね・・・ハクアの倍はある訳で・・・。

細かいことはいいか。

「あーアミ！やっと起きた！」

あたしの姿を確認したハクアが、嬉しそうにそう言いながら、隣に降り立った。持っていた鹿の様な生物をハクアが降ろすと、ズシンといかにも重そうな音がした。

「やっとって・・・？あたしどれ位寝てたの？」

寝ている間の記憶が無いのは多分当たり前だけど・・・ハクアの言い様からして、一日二日って感じじゃない気がした。

「百年」

「は？」

思わず頓狂な声を出してしまった。

百年？

1000年？

ひゃくねん？

ヒャクネン？

なんか最後の名前みたい。

「いやいや、そうじゃなくて！百年！？嘘でしょ！」

まず前提があり得ない。人間仮に百年寝て過ごしたとしても、その間体は成長するんだから少しは背丈が変わっていても可笑しくない。それなのに、あたしの体は悲しい位気を失う前と同じ。何より、百年も寝ていたなら、その間の栄養はどこから摂取してたんだろう？

「うっん、ホント。でも、さっきはやつとって言ったけど、これは凄いことだよ？」

凄い？

「何が？」

百年寝ていたことが？

うん、まあ、百年寝ていたことはもう認める。

「わたし達ドラゴンの血が人間の体に馴染むには最低でも五百年、長かったらそれこそ何千何万という年月が必要になるのに、たったの百年で馴染んだんだから」

どういうことが聞くと、本来ドラゴンと契約するには相当の鍛錬を積み、肉体的にも精神的にも極限まで鍛えられた者でないとまずできならしい。これはドラゴンの血に耐える為で、それを疎かした場合、口に含んだ瞬間に強烈な拒絶反応が出て、飲み込むことすらできないとか……。

そして、歴史を辿ってもドラゴンと契約した者はたったの三人で、その三人ですら、馴染むのに千年近く掛かったとか……。

それなら、どうしてそんな鍛錬なんかとは無縁だったあたしが耐えられたのか？

その上で、たった百年で血が体に馴染んだのか？

それについてはハクアも分からないらしい。

「何かあるのかも知れないけど、とにかく良かった！」

まあ、いいかな？

そこであたしのお腹が鳴り、空腹を訴えた。

そして、ハクアが持ってきた鹿の様な生物を見ると、何故か食欲が沸いてきた。

「あ、お腹減った？今から焼くからちょっと待っててね？」

「焼く？」

あたしの疑問には答えず、ハクアは鹿……もう鹿でいいや。それを持ち上げ、ひょい、と上空に少し投げて、それに向かって

ゴアアアアア！

炎を吹き付けた。

口から吹いて……。

そして落ちてきた鹿はこんがり焼けていた。

それがまた香ばしい匂いを発していて食欲をそそられる。

「はい、召し上げね」

「いただきます！」

鹿にかぶりついてどんどん食べていく。そして、あたしの体の倍はあった鹿は、十分程で全てあたしのお腹の中に収まった。

「いい食べっぷりだね。それだけ食べられるなら、問題はないか」

「……ドラゴンと契約すると、ご飯もそれになるの？」

そう聞くと、ハクアは頷いた。

「あとは、治癒力とか、腕力とか脚力とか、身体能力は全て常人のそれを上回るよ？試しに壁でも殴ってみて？」

ちよんとつつく位でね？とウインクをしてみたハクアにあたしは少しときめいた。

とりあえず、壁に向かって拳をちよんと当てると、

ゴバアツ!!

「え……?」

十メートル位の横穴が開いた。

それから、まずは力の制御をできるようにしなければならぬと分かったので、ハクアに色々教えて貰った。

殴ったり、物を掴む時は、力をこれでもかと言う程緩めて、本当に触れるか触れないか位にしないと木っ端微塵にしてしまうらしい。

「まあ、要は慣れだよ」

えらくアバウトな……。

でも、実際そうか……。

「多分早ければ、明後日には制御できるとそれくらいできると思うから、そしたら世界を回ろうか?アミのことも聞きたいし」

「うん」

早速力の制御の特訓を開始して、予定通り二日後にはできるようになったから外に出ることにした。

洞窟を出て最初に見たのは、地球ではあり得ない程の森林で覆われた大地と、遙か彼方に見えるのに圧倒的な存在感を放つ巨大な山だった。

その景色に見惚れているあたしにハクアは言った。

「 ようこそ、ウルベリアへ 」

開始 (後書き)

亜「ハクア、あたしが寝ている間なにしてたの？」

ハ「アミをつついたり、アミを眺めたり、アミを舐めたりしてた」

亜「最後のはなに？」

ハ「見てたらつい。テへ」

亜「ぐ・・・可愛い／＼／」

ハ「アミ？顔赤いよ？」

亜「なんでも無い！」

ハ「あ！アミ、待ってよ。道分らないでしょ？」

## 永遠

洞窟は崖の中腹辺りにあつて、ハクアに飛び降りると言われた時、大丈夫なのか心配になったけど、契約してるから大丈夫と軽く言われた。

まあ、確かにそうか・・・。

それでも怖いのは怖いから、ハクアと手を繋いで一緒に飛び降りた。途中何度か木に当たったりもしたけど、どこもけがとかなかった。

凄いな、契約。

「此処は誰も来ないけど、魔物はわんさかいるから、警戒しておいてね?」

「まもの?」

「そ、この前、アミが食べたのも魔物」

ハクアはあたしの手を引っ張って、歩き始め、魔物についての説明を始めた。

この世界・ウルベリアにはマナと言う、地球で言う酸素の様な物質が絶えず循環していて、動物は全てそれを吸収して生きているらし

い。

そのマナを長い間吸収し続けて、他の動物よりも凶暴性が増したり、知性が増したりと表れる症状というか、それは動物によって色々な種類があるらしい。

でも、大部分が凶暴性が増すだけで理性を失って暴れるらしい。

知性が増したりするのはほんの一部だけ。

「魔物の始まりは約五千年前。たった一体から始まった」

そのたった一体の魔物と言うのが、繁殖力の高い生物だったみたいで、瞬く間に増えていったらしい。

最初はその種の魔物しか居なかったのが、異種交配とでも言えばいいのか、それによってどんどん種類が増えていって、気付けば世界には魔物が溢れていたらしい。

「ま、それで滅びたりした訳じゃないけどね？現に今も、ウルベリアは存在している訳だし」

ハクアはそう言って、魔物の話を終えた。

\*

三日くらいかけて森を抜けると、人の手が全く入っていない平原があった。

視認できる範囲だけでも結構な数の魔物が居るけど、どの魔物もあつたし達に襲い掛かってきたりしない。

ハクアが言うには、魔物ももとは普通に動物だから、本能があつたたちは危険だと告げているみたいで敵わないことが分かってるらしい。

ちなみにハクアと契約した恩恵というか、そういうたものは結構ある。

遠くの方が見えたり、普通なら聞こえないレベルの音が聞こえたり、ほんの少しの匂いも分かったりと、簡単に言えば、感覚という感覚の全てが、桁外れになっている。

「だから、当分アミの相手はわたしがするから」

「うん。それで、この平原でどこまで続いているの？今の視力でも先がずっと平原なんだけど・・・」

「そりゃそうだよ。普通の人間が此処を抜けようとしたら、どんなに強い人でも一月は掛かるもん」

「一月ね・・・何でだろう？既に百年生きてるからなのか、長いと思わない」

聞いた瞬間、え？ たったそれだけ？ とか思ったもの。

「あはは。時間に対する感覚もわたしたちと同じになるからね。今のアミだったら、千年が一年くらいに感じるかも知れないよ？」

「千年って・・・いくら何でもそこまで寿命は持たないでしょ？」

ドラゴンだけなら、それくらい生きてても可笑しくないとはい思っけど、契約したとは言っても、結局あたしは人間なんだし・・・あれ？ でも、契約して血が馴染むのに千年掛かることもあるって言ってたし、あるのかな？

でも、仮に寝てる間体の時間が止まってるとしたら、生きてるのはむしろ当たり前な訳だし・・・。

「ううん。持つよ？ というか、死なないから」

「・・・・・・は？」

「死なないよ？ アミも、もちろんわたしも」

「え？ どういうこと？」

流石にこれはさらっと聞き流してはいけない。

死なないってことは、要は不死身ってことだし・・・。

「この、死なないって所が、ドラゴンと契約して得ることの出来る最大の恩恵、とでも言えればいいのかな？ わたしたちドラゴンの生命

力は、他のそれとは一線を画しているから」

「でも、それが死なないってことに繋がる訳じゃ無いでしょ?」

「もちろん」

ハクアは歩き始めた。

あたしもそれについていく。

「この前、魔物の話をしたでしょ?」

空を見上げ、後で手を組みながらハクアは聞いてきた。

「うん。約五千年前から始まったって・・・」

「そう。でもね?わたしたちドラゴンはもっと前から、それこそ、ウルベリアが誕生した位大昔から存在してるの」

「それって、どれくらい前から?」

「ざっと数えて八十億年」

「そんなに!?!」

「うん」

地球で言う、恐竜みたいな存在ってことなのかな?

例えが思いつかない。

「でも、その時を全てのドラゴンが生きてる訳じゃなくて、今生きてるのは、わたしを除けばほんの四体だけ。他のドラゴンは、契約者が見つからなくて、寿命で死んじゃったり、老衰して殆どの力を失っていた所を、人間や特別強い力を持つ魔物に殺されたりしてね。・・気が付けば、たったのそれだけになってた。・・。」

顔が見えないから、分からないけど、多分今のハクアは悲しい表情をしていると思う。

「話が逸れたね。」

ドラゴンは元から超長寿の生命体であり、自分が認めた者と契約を結ぶことが出来れば、永遠の命を得るってこと。

未だに、何故そうなるのかは分かってないけどね？」

振り向いたハクアは、いつもと変わらない顔をしていて、悲しんでいた様な気配すら無かった。

「・・・・・。」

「もしかして、迷惑だった？」

何も言わないあたしに対して、何を思ったのかハクアは突然そんなことを聞いてきた。

「え？何が？」

「何がって・・・契約したこと。説明も何もしないまま、半ば無理

矢理な気がしたから・・・」

「そんなこと無いよ。唯、ハクアが悲しんでるんじゃないかって思  
つて・・・」

「え？・・・あはは、確かに悲しいけど、もう慣れちゃったから・  
一人で居た時間が永すぎて。だからって訳じゃ無いけど、そんな  
心配はしなくてもいいよ？」

寧ろ今は、迷惑じゃなかったって分かったから、嬉しかったし」

「そっか。良かった」

あたし達はまた手を繋いで、平原を進んだ。

暫く進んだ所で、休憩ついでに空の飛び方を教わることにした。

森を歩いている時に、飛べるってことは聞いたけど、流石に木ばか  
りの所を飛ぶのは無謀だろうと思って、先延ばしにしてたんだよね  
・・・。

「教えるって言っても、わたしたちにとって、飛ぶことは本能だか  
らね。原理がどうこうの話じゃないんだけど」

「でも、あたし本能どころか翼すらないし」

背中に手を伸ばしてみても、それらしき物がある感じはしない。

「背中に思いつきり力を入れてみて？」

「え？どうして？」

「いいから」

「？うん」

分からないけど、とりあえず言われたとおりにしてみる。

「ふっ！」

バサ！

「え？」

力を入れた瞬間そんな音が聞こえて、首を九十度横に向けて見ると、そこには白い翼があった。

間違いないあたしの背中から出てるんだろうけど、痛みとかが全くないのはどうしてだろう？

聞いてみると、

「どんな傷も一瞬で治るからね。服は直らないけど」

とのこと。

まあ、確かに翼の音が大きかったけど、勢いもそれだけあった訳で、

制服は見事に破れた。

「一度出すのに成功すれば、後は出し入れ自由だから。試しに引っ込めてみて？」

「えつと・・・こう？」

広がった翼を、少しずつ小さくしていく感じで、畳んでいくとまた背中には何もない状態になった。

穴が空いた所が少しスースーする。

「そうそう。それじゃ、練習を始めるから、もう一度翼を出して？あ、力は軽く入れるだけでいいよ？」

「うん。んしょ」

ハクアの言ったとおり、今度はほんの少し力を入れるだけで、翼が出た。

「最初はわたしと手を繋いで、飛んで、少しずつ慣れていこうか？」

「うん」

「はい」

翼を広げながら、ハクアは手を差し出してきた。

あたしはその手を取る。

「行くよ？」

「うん」

手を繋いで、あたし達は空へと舞い上がった

永遠（後書き）

亜「それにしても、不死身かあゝ・・・ハクア、暇じゃなかったの？」

ハ「暇だったけど、人間は色々新しい物を造るからね。それを見ているのは楽しかったよ。後は、偶に仲間とも会ってたし」

亜「どんなドラゴンなの？ハクアの仲間って」

ハ「年中百％天然な娘に、どんな時どんな状況でも寝られる娘ですよ。それから、とにかく遺跡巡りが好きな娘と、海でひたすら海獣と戦ってる娘」

亜「へゝ・・・面白そうな人達だね？」

ハ「うん！きっと仲良しになるよ？」

亜「だと良いけど」

## 登録

飛行練習を始めて、約五時間が経ち結構飛べるようになった。

ついでにこのまま平原の先にある街まで飛んでいこうと言うことになった。

この世界には魔法があつて、その中に飛行魔法はあるらしいけど、それは・・・というか、魔法全般において、使用するにはある程度の才能と内包している魔力が必要だそうで、使える人の中でも個人差が大きいらしい。

魔力の量は、十五年。

この世界で、成人となる年になるまでに呼吸して取り込んだマナをどれだけ留めることが出来たかで決まるとか。

大体の人は火の初級魔法であるファイアボールや水の初級魔法であるアクアボールは使えるらしい。

全く使えない人の方が珍しいとかなんとか・・・。

「でも、今アミがやっている飛行は魔法とか関係ないよ？これも恩恵だからね」

なんとなくそうじゃないかな、とは思っていた。

翼を出した時も、飛び上がった時も、飛んでいる今も、その魔力とやらを使っている様な感じはしない。

そもそもあたしに魔力があるのかどうかも分からないけど。

街が見えてきた所で、近辺に人が居ないのを確かめて街道に降りる。

「誰かに見られたら面倒だからね。誤魔化せば良いけど、見破る人もいるから」

「そんなこと出来るの？」

「うん。て、凄く今更なんだけどさ・・・アミ、色々知らなすぎじゃない？」

「当たり前だよ。この世界の人間じゃないもん」

「・・・へへ・・・へ？」

言っとハクアは、きよとんとした顔をした。

可愛いな。

\*

「つまり、そのちきゅう、っていう世界のがつこうって所に通って、幼馴染みの二人と帰っていたら、黒い穴に吸い込まれて」

「飛ばされた。正確には落とされたのかな？それがここ、ウルベリアだったってこと」

とりあえず、街道から見えていた街。

ニューアージュの宿で部屋を取って（お金はハクアが持ってた）、そこでこっちにきた経緯を話した。

といっても、ハクアが繰り返したことを少し詳しく話したただけなんだけど……。

「だから空中に居たんだね？」

「そういうこと。最初はスカイダイビングみたいで楽しいと思ったけど、ハクアを見て、地球じゃないってことを認識したら、急にテンションが下がったんだよね……」

「……………」

「まあ、ハクアがあのおとき、あそこを飛んでなかったら、あたしはそこで終わってたけど。」

だから、ありがとうね？助けてくれて」

「アミ……。うん！」

話はそので一旦終わりにして、次はこの世界の通貨について教えてもらった。

銅貨・銀貨・金貨・白金貨。

銅板・銀板・金板。

銅貨が日本で言う百円分。

銅貨五十枚で銅板一枚、五千円分と交換出来る。

銀貨が一枚一万円。

これも五十枚で銀板一枚、五十万円分と交換可能。

金貨は一枚百万円。

これは十枚で金板一枚、一千万円分と交換可能。

白金貨は一気に跳ね上がって、一枚一億円に当たるらしい。

これは板が無いそうで、交換不可。

「でも、白金貨なんて、殆ど貴族とか王族とかにしか縁が無いけど

ね？」

それはそうだろう。

一億円なんて額がおいそれと出回る訳がない。

宝くじの様な物でもあれば別だろうけど。

「ついでだから、ギルドについても話そうか」

「ギルド？」

「うん。依頼とか魔物の討伐とか受けて、報酬としてお金やアイテムを貰うところ。十二歳以上で二人以上なら誰でも登録できるよ。」

二人以上と言うのは、危険を最小限に減らす為の、本部の措置らしい。

魔物の討伐の中には、一人では到底倒せない魔物も居るらしくて、もし戦闘中どちらかが死んでしまう様なことになったら、残った方が助けを呼ぶか、逃げる事が出来るようにしているとか。

。「死なずに二人とも帰還……ていうのが一番良いんだけどね……。」

命が無いと、人は何も出来無いどころか、しようと思つことすら出来ないから」

「確かにね……。」

ギルドのことは分かった。

それで、疑問なんだけど、あたしとハクアは死なないんでしょ？それって、寿命で死なないってこと？心臓を抉られたりしたら、死ぬの？」

我ながら例えがぐるいな、とも思ったけどこれは知っておかないとだめなことだろう。

「死なないよ？文字通り死なない。死ねないって言うてもいいかな？

例えば心臓が抉り出されても、一時的に永い眠りに着くだけで、次に起きた時には心臓は再生してる。

他の臓器も部位も同様に」

ただしそれは契約者のみ。

ハクアは最後にそう言った。

\*

ギルドに登録していれば、通行証替わりとかにもなるからってことで、登録することにして、とりあえずこの街にあるギルドに来たけど、入った途端周りの人から変な視線を向けられた。

無視して受付に行き、登録しに来たことを伝えると、紙を渡されて

名前と年齢、それからスキルと言う欄があった。

「ハクア、スキルって？」

「その人が持つてる特技みたいな物だよ。詳細は説明するよりも、自分で見て確かめた方がいいから、まずは持って行こう？」

「うん」

とりあえず空欄のまま、名前と年齢だけを書いて、また受付に行つて紙を渡した。

「確認させて……え？」

紙を見た途端、受付のお姉さんが固まった。

でも、すぐに元に戻つて年齢が間違っていますよ、と言ってきた。

紙が返ってきて、確認する。

でも間違っていない。

ちゃんと百十六と書いてある。

ハクアの方も間違つて居ないみたい。

「あの、これで合ってますよ？」

「え？でも、百十六って」

「はい。あたし百十六歳です」

「え？ええ……」

お姉さんは、混乱してしまった様で少々お待ちを、と言って奥に消えた。

五分ほどして、ここの理事長かなにかなのか、白髪の爺ついおじさんと一緒に戻ってきた。

目が鋭すぎ……。

「お前達か？これを書いたのは？」

おじさんが見せてきたのは、さっきあたしとハクアが書いた紙だった。

同時に頷く。

「大人をからかうもんじゃない。見栄を張る必要なんてねえんだから、本当の年齢を書け。こっちも仕事だからな」

「だから、本当の年齢を書いてるんですけど？大体年齢で嘘付く必要なんか無いじゃないですか」

「そうですよ」

「だから、嘘はつくなと言っている」

「ついてません。本当に百十六歳なんです」

「んなわけあるか。自分の姿ちゃんと見たことあるか？」

「ありますよ。毎朝見てましたよ。歯磨きするんですから」

「それなら、どう考えても百十六なんてのがあり得ないことは分か  
つてるだろ？」

「分かってますよ。でも本当なんです。なんなら確かめてみて下さ  
いよ？」

「はあ・・・分かった。奥に來い」

折れないあたしに折れたのか、おじさんにそう言われて、あたしと  
ハクアは奥についていった。

通されたのは、大きな部屋でそのソファに並んで座り、正面には  
おじさんが座っている。

「たく・・・ガキの冗談に付き合ってる暇なんか無いんだけどな・・・  
」

溜息をついてそういうおじさん。

「いいから、早く確かめて下さいよ？」

「分かった分かった。オレの目を見る」

言われておじさんの目を睨む。

「睨むな」

「睨んでません。これが普通です」

「はあ・・・いいか？反らすなよ？」

「・・・」

何も言わず睨み続ける。

すると、おじさんの目に何か紋様の様な物が浮き上がってきた。

少し驚いたけど、そのまま睨んでおく。

「！」

おじさんの目が急に見開かれてビックリした。

「アミ、そんなに驚かなくていいよ？これで分かりましたよね？」

「あ、ああ・・・悪かった」

まあ、その後、手続きを済ませて、無事ギルドカードを発行してもらえた。

本人が持って、念じれば表示を出したり消したり出来るらしい。

便利なこと。

「それじゃ、スキル欄を見てみて？念じればいいよ？」

「うん」

手に持って、念じてみると、多分表に名前と年齢が表示されて、中央辺りに大きくDと出た。

これは後で説明して貰おうとして、カードを裏返す。

『契約者』

裏にはそれだけ書かれていた。

登録（後書き）

亜「全く・・・あのおじさんは、しつこいんだから」

八「まあまあ。いいじゃない、分かってくれたんだから」

亜「まあね？それで、おじさんが使ったのがスキル？」

八「そ。街に入る前に言ってた、見破るスキル。敵の弱点とか、能力値とか色々分かる結構便利なスキル」

亜「へ〜・・・まあ、追々知っていけばいいかな？」

八「うん。時間は本当にいくらでもあるからね」

亜「そうだね。色々教えてね？」

八「もちろん」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7765y/>

---

高町亜美の物語

2011年12月3日16時47分発行